
リプレイ

タンポポ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リプレイ

【Nコード】

N6441A

【作者名】

タンポポ

【あらすじ】

怒った拍子に瞳が赤くなってしまふ少年。その少年の前に突如現れた天使…。『生まれ変わったら何になりたい？』果たして少年が望んだものとは…？ーこの小説が気に入ってくれた方は《ちょメリプ2》をご覧ください。続編が書いてあります。

第1話　赤い目

「こんにちは」

不意に後ろから声をかけられ反動的にビクついた心臓。

「あなたに言ってるのよ、木ノ下　譲　（きのした　ゆずる）　君」

『あ…はい』

振り返ると目の前には、同じ年ぐらいで身長は低め、色白で大きな瞳、ストレートの長髪でこの辺じや見ない制服を着ている。なんとも可愛いらしい女の子が微笑んでいた。

「こんにちは」

『あ…あの、なんですか？』

警戒心むきだしで返事する。

「もう、あいさつされたらあいさつするのが基本でしょ！」

『あ…すいません』

注意されるとすぐ謝ってしまうのも今ではもう慣れてしまった。

「ふふっ冗談よ。それにしても噂通りの目ね」

何を言ってるのか状況がつかめない。噂通り…？

『あ…あの今から学校なんで失礼します』

人との会話が苦手な俺は、この場を逃れようと歩き始める。

「学校ね…屋上で授業をサボるために行くの?」

自然と止まる足。

『な…』

「なんで知ってるんだ!？」

今言おうとしていたコトをそのまま言われしまった。さすがに少し慌ててしまう。

「まあ、こんな所じゃなんだし…ファミレスでも行きましょ?」

手を引っ張られ連れてかれようとするが俺は無理矢理踏み止まる。

『…触るな!』

「あらあら…こりゃ大変そうな仕事だわ」

ため息をつく女の子。

仕事とは一体何なのか、その娘への疑いは増すばかりだ。

「もっとゆつくりした所で話したかったけど、ここでいいわ」

彼女は話始める。

「まず、私の名前は小森^{こもり}愛^{あい}。…と言うのも人間界の別名で、本当の名前はエン・リユーファ^{エン・リユーファ}って言うの。讓君からしたら初めましてね」

おいおい…、何言い出すんだこいつ…。人間界？

「人間から見れば、天使ってとこかしらね…」

ふざけてるのだろうか、俺は天使などという人間の架空上でしか存在しないものは認めない主義だ。

「神様からの使いでね…あなた、讓君を助けに来たの」

はあ…くだらねえ。

俺は話の途中で歩き始める。

「信じてないみたいね。…まあ、無理もないけど」

『当たり前だろ！いい加減にしろ！』

「口が悪くなってる！あんまり興奮するとまた目が…」

『……………くっ！』

俺の目は真っ赤になっていた。決して充血しているとかではなく、瞳が赤くなるのだ。

『…ちっ』

俺はすでに見られてしまっているが、慌てて前髪で両目を隠した。

「いつもそうやって伸ばし放題の髪で目を隠す。友達にも反抗できない。興奮した拍子に目が赤くなったら気味悪いつて思われる」

俺の本心を綺麗に並べる愛と名乗る女。

「だからいつも一人ぼっち。人と関わらない様になっているのね」

愛はさらに続ける。

「あなたがそれに気付いたのは小学三年生の頃…親友だと思ってい

た人に裏切られた」

『…………ろっ』

「それ以来人が苦手になり、誰にも言えない秘密を隠してきた」

『…めろっ！』

「恋人どころか友達もいない。両親も三才の時に事故で他界して親戚の家をたらい回し。今となっては施設とはね」

『やめろおーっ！！』

もはや俺の目は真っ赤であるだろう。

「天界から見させてもらったわ」

『だからそんな話信じられるわけ……………う！！』

愛の背中に大きな…羽の様な物が見える。

『うわぁ！』

「信じた？」

愛の背中には片側直径2メートルの羽が両肩についていた。

服の中に隠すのは不可能。仮に隠したとしても制服の背中が大きく膨らむはず。

『…な？……はあ？』

あまりの突然に俺は言葉を失ってしまった。

「大丈夫。私の姿が見えるのは譲君だけよ」

先ほどから通り掛かる人の視線が気になっていた。こんな昼間っから制服を来た男女が二人話しているからだと思っていたが…

「つ、ま、り、周りの人から見れば今までの会話はあなたの独り言」

クスッと微笑む愛。

俺は恥ずかしさのあまり、目だけじゃなく顔まで赤くなってしまった。

『…じゃあその制服は何だよ！』

「これはサービスよ。第一、こんな格好しないと話聞いてくれないでしょ！」

するとフツと風が吹いたかと思えば愛わ白い布の様な服を着た姿になっていた。それは普段人間が想像している天使の姿そのものであり、エン・リユーファの本当の姿だった。

『…で、その天使が何しにきたんだよ』

「だから言ってるでしょ。あなたを助けに来たって。……赤い目を
持つなんて…どの世界でも嫌われるんだから…」

急に遠い目になった愛。

何が助けに来ただ。

何が赤い目はどこでも嫌われるだ。

急に悲しそうな顔しやがって。

あんたの目だって赤いじゃないか。

第二話く身勝手く

『お、おい…その目』

「…あー!」

愛は慌てて人間の姿に戻り、作り笑顔で微笑む。

「見られちゃったね…譲君は怒りの感情が溢れると、私は悲しみの感情が溢れると赤くなるの…」

『…そうか』

「…って、私はこんな事言いに来たんじゃなくて!……なに笑ってるのよ」

いつの間にか俺は笑っていたようだ。

『別に、ただ嬉しくって』

「…嬉しい?」

『ああ、今まで辛かった。あんただってそうだろ?天使だろうと人間だろうと…一人は淋しいよな』

「そうね、だから私はあなたを助けに…」

『あんたが俺を助けたらどうなる?俺は救われるのか?一人じゃなくなるのか?』

「そうさせてみせる…！」

『あんたは…？』

「…え？」

『天界に帰るのか？』

「もちろん。仕事が終われば私の役目は終わる。讓君の私に関する記憶も消させてもらっわ」

『それじゃあんたは救われない。あんたはこの仕事が終わればまた一人になっちまう』

俺の言葉に愛は呆気をとっている。

「…フフ、珍しい人間ね。大丈夫。讓君より不幸な人はまだたくさんいるの。次の仕事が始まれば…」

『いつ終わる…？』

「だから、讓君が救われれば…」

『そうじゃない。あんたの悲しみわいつ終わるんだ？』

「終わらなくても…仕事だから…」

』

愛の目はまた赤くなっていたが、俺はあえて触れなかった。

『そうか…、じゃあそろそろその仕事という内容を聞こうか』

「うん。まず、讓君には生まれ変わってもらおう」

『生まれ変わる…？』

「ええ、一度くらい何かになりたい。って思ったコトくらいあるでしょう？」

そりゃあ、鳥になって飛びたい…とか、まあ思った事はある。

『記憶はどうなる？俺は昔人間だった…なんて記憶は残るのか？』

「最初に残るわ。シュミレーション期間は一週間。それで生涯この姿で生きると決めたら、讓君の人間としての記憶は消える。嫌ならまた変わる。でも、同じ物に二回なれないから気をつけてね」

『なるほど…』

「たとえシュミレーション期間でもその間に命を絶つかもしれないからね」

『あんたはその間どこにいる？』

愛は少し黙る。

「そのあんたってのはやめなさい。愛って呼んでよね」

『…分かった。愛はどこにいる？』

「天界から讓君を見守ってるわ。讓君がきてほしいタイミングでまた現れる」

大体話はつかめたな。

用は俺にとって、今のこの生活を変えるチャンスなんだ。

「さあ、何になりたいか考えておいて。三日後の三時にまたこの場所で見えよう」

愛はそう言い残すと空高く飛んでいった。

残された俺はまだその場に立ち尽くした。頭の中わ何になるかよりも、今起きた事態が夢じゃないか確認する。

なんか今日は色々あったな。

辺りは日も沈み、うつすら暗くなっていた。

『今日はもう寝るか』

俺は家…というよりも施設に帰り、部屋で眠りについた。

――――。

朝、目が覚めると時計の針は信じ難い事になっていた。

何になるう…

そう考えただけで悩み、あまり眠れなかった。

『もう…人間は嫌だな』

人間は嘘をつく。自分が有利な様に。

それに身勝手だ。信用の場所がない。

信じれば利用される人間はもうゴメンだ。

動物になるうか…。

動物は自由だ。学校も仕事もない。群れを作るが、人間とは違う協力性を感じる。

『あ…しまった。肝心な事を聞くのを忘れた』

俺が聞き忘れた事…それは生まれ変わっても目は赤くなってしまうのかだ…。それが分からなくては、生物に生まれ変わるのとは考えものだ。

『まあ、今度でいいか』

〓三日後〓

「こんにちは」

『ウッス、時間通りだな』

「フフッ、今回はあいさつしてくれたね」

『まあ、愛には世話になりそうだしな』

仲間…と呼べるのが天使だっていい。ただ、愛と話すのが楽しみだった…なんて口が裂けても言えないな。

「じゃあ改めて聞くね…何になりたい？」

『その前に一つ…俺の目はどうなる？』

「…それは分からない」

予想外の答えが返ってきた。

『ちょっと待てよ！前の仕事で俺みたいなのはいなかったのか？』

「…いたわよ」

…あ、愛の目が赤くなってる？

『じゃあ、そいつはどうなった？』

聞いちゃいけないと思ったけど、聞かずにはいられなかった。

「死んだ。正確には、殺した」

『…なぜ？』

「讓君はラッキーなの。赤い目を持つ人間は殺さなくてはならないのが天界の決まり。でも、これからは生まれ変わればどうか？って事になったの」

つまり、俺は神様の実験台ってわけか。それになんか…天使って悪魔みたいだな。そりゃそうか、天使のイメージは俺達が勝手に作ったものなんだからな。

「…さあ、どうする？」

俺は深く息を吸い込んだ。

『…鳥になりたい』

「分かった」

愛があきらかに日本語でも外来語でもない言葉を放つ。おそらくこれが呪文というやつだろう。

愛が両手を俺の方に向けると、目も眩む程まぶしい光に包まれた。

『…う』

別に痛みなどはない。ただ、不思議な気持ち。

フツと体が楽になった。ギリギリで目を開くと俺の体が目の前にあり、徐々に体から離れ、俺は意識を失った。

――――。

目を開くと目の前は真っ青に白い雲…ここは空だ。

『飛んでる！…スゲエ！』

「どう？一週間以内に答えを出してね。じゃないとずっとこのままの姿になるからね。それから、死なないように！」

『分かった。しばらく慣れるために飛んでみるよ』

黒い翼、黒い体。しゃべろうと声を出すとカァーという泣き声。俺はカラスになっている。

これでもう俺は人間ではないし、人間としゃべる事もできなくなつた。

愛は天使だからきつと言葉が通じたんだな。

『おおー、なんか気持ちいいなあ。ハハハ、人間があんなにちっちゃいや』

するとカラスの群れがやってきた。俺もそこに加わる事にした。

そっか、食べ物を取りに行くんだな…って、ゴミ箱ー！？

集団は家庭ゴミを出す場所に群がり、食べ物を探している。

『こんなん食えるのか？』

ぐちゃぐちゃになった家庭ゴミ。なんとか食べられそうな物は…

くバササッく

何を思ったか、一斉に逃げ出すカラス達。俺は訳も分からずア然としていた。

が、次の瞬間…

くドゴシッ…！…く

鈍い音と共に激しい痛みが頭に走る。

……ほつき、…人間？

「またこのカラス共はゴミ荒らして！」

薄れゆく意識の中で覚えているのは人間にほつきで殴られた事。

そうか…。忘れてたぜ…。

人間は身勝手なんだ…。

人間が動物を平気で殺しているが罪に問われない奴がほとんどだ。

大袈裟な話、悪人を裁くものだって…動物からすれば罪人なんだ。

動物の肉を食ってるからだ。

なのに、人間が【生きるためだ】だからしょうがないって言うんだ。

今、人間を客観視して分かった。

動物は人間に逆らえない。

たとえ…生きるためでも…

許されないのだ。

『う…あ…』

まだ…生きてる。助かるか…？

「ホント気味悪いカラスだこと…！」

ほうきを手に持ったおばちゃんが俺に制裁を食らわした後、散ったゴミの片付けをする。

「おい、カラスが道端で死んでるぞお〜！」

「あ…生きてる！殺せ殺せ！」

くそ、近所の餓鬼どもか…。死にかけた俺をエアガンで狙っている。

ちくしょう、もうダメか？

なぜ助けない…？

俺がカラスだからか…？

人間じゃないからか…？

これじゃあ何も変わってないじゃん。

人間は…身勝手だ…。

最終話〜リプレイ〜

「…る！…譲！！」

誰かに呼ばれてる…？

この声は…愛か…。

『う…あれ？俺どうなったんだっけ？』

確か…そうだ、俺はカラスになって人間に殺されかけたんだった。

『俺…生きてる？』

「当たり前でしょ」

『でも、シュミレーション期間でも死ぬって』

「あんなの嘘よ。ああいう言い方しないと無茶する人がいるかもしれないからね…」

よかった。とりあえず生きてる。姿は、人間に戻ったのか。ここは…施設の俺の部屋か。

「大変だったわね…どうする？また何かに生まれ変わりたい？」

『なんでだろう…』

「…え？」

『なんで人間は動物をいじめるのかな…？』

「…いじめているわけじゃない。生きてるだけよ」

『でも動物は生きるためでも人間に逆らうコトは許されない』

もし…もし仮に、人間より遥かに身勝手な新生物が現れ、この世を支配したら…俺らはどうなるのかな…？

平気で殺され、逆らうコトもできない。

そんな事って…酷いよ。

酷い…？

違う…！！

これは…俺達人間が動物にしている事じゃないか。

俺だって身勝手だったんだ。

『…愛。何にでも生まれ変われるのか…？』

「意志があるものならね」

『じゃあ、俺が神になる。この世界を…変える』

「それはできないわ」

『…な、なぜ！？』

「神様は絶対なの。そもそも生まれ変わる時に神様に頼むの。そんなの無理に決まってるでしょ？…それに神様が二人いたらどうなると思う？意見の違う絶対がぶつかれば世界が滅びるかもしれないのよ」

愛の呪文の様なものは神様との通信だったのか。

しかし、困ったなあ。他になりたいものもないし。

いや、なりたいたいけど…人間を敵に回すのが怖い。

『時間はどれくらいある？少し考えたい』

「シュミレーション期間が終わってから一週間よ」

『あと一週間か』

「いえ…明日までよ」

『…え？』

「あなたは六日間気を失ってたわ。それにしても、ここの施設の間はたいしたものね。讓君が六日も起きないのに心配のひとつもないんだから」

『ハハっ、それは普段俺が無愛想だからいいんだよ』

さらに困ってしまった。明日の三時までに決めなくちゃいけないのか。

今は昼の三時か、あとちょうど二十四時間後…か。

『分かった。じゃあ、また明日な』

「うん。また…」

そう言い残して愛は天界に帰っていく。

部屋の周りを見回せば、見舞いの花が花瓶に飾られていた。

スーパーなんかではなく、花屋専門店で売っているような綺麗な花。見るだけで心が洗われる様だ。

誰がこんな事をしたんだろう。俺を心配してくれる人なんかいないし、愛はターゲット以外の人間からは見えないはず。

まあ、いいか…そういえば、愛の目は黒かったなあ。

俺が気を失ってても悲しくなかったの…かなあ…。

～次の日～

「今日は学校に行こう」

俺は学校へ行った。…とは言っても向かうのは屋上。

もしかしたら今日が最後の学校になるかもしれない。
朝、遅刻寸前で校舎に入る。…すると

「オッス！譲。お前最近休みがちだな。単位とれねえぞ！」

確か…同じクラスの岩嶋 彰吾（いわしま しょうご）だったな。

『あ…ああ。気をつけるよ』

「おいおい…どこ行くんだ？教室はこっちだぞ」

あう～屋上行こうとしたのに…

無理矢理のように章吾に連れられ、教室に入る。

「オッス！」

「おう、彰吾！…あれ？確か…譲？」

彰吾の友達か…。なんか苦手なんだよなあ。

彰吾はクラスのムードメーカーでいつも明るく面白い。女の子にも人気だ。

「いやよお、もうそろそろ俺ら高校二年だろ？最後までいみんな仲良くしようってなってるな」

彰吾らしい…いい奴だなあ。俺がもつと素直だったらこいつと親友になれたかもなあ。

「それからな、あと一人来てない奴がいるんだけど、今日来るかなあ？」

「それ、沢田^{さわだ}大樹^{だいき}だろ？あいつ留年確定だから辞めたって話聞いたぜ」

「うーん…でも昨日大樹に電話したんだけどおーあいつクラスにいる時とテンションが違うつーか、明るい奴だったぜ？」

「はあ？俺大樹が笑ってるとこなんて見たコトないぜ？」

よく分かんないけど、大樹も俺と同じで来てなかったみたいだな。

「…あ、おい！どこ行くんた讓？」

こっそりと教室を逃げようとした所を章吾に見つかってしまった。

『ゴメン彰吾。気分悪いから保健室行ってくる』

「そ、そうか。病み上がりなんだから無理するなよ」

こんな俺を気遣ってくれるなんて本当に良い奴だな。

しかし、もちろん気分が悪いなんて嘘だ。屋上に向かう。

くガチャく

…あれ、先客がいる。まいったなあ。

「…うわあ！」

いや、何もそこまで驚かなくても…って、こいつ…目が赤い？

「あ…ああ」

『あ…えっと…その目…』

「あ…お願い！誰にも言わないで…」

こいつも俺や愛と同じ…？

『君は…?』

「あ…ってゆうか君、讓君だよな? 僕、同じクラスの沢田大樹って言っんだ」

『君が!?!』

「あれ? 知ってるの?」

『さっき教室で君の話を聞いたよ』

「僕の? あ、彰吾君か」

『ああ。せっかく来たのに教室行かないのか?』

「だって目が……讓君はあまり驚かないね」

『まあな』

なんせ俺本人も目が赤くなるからな。

「僕ね…本当はみんなと仲良くしたいんだ。でも…臆病だから…目が赤くなっちゃうの…」

大樹わ恐怖心で目が赤くなるのか…。

『俺も怒ると目が赤くなるんだ』

「…そうなの？」

『今…天使って奴に生まれ変わるって言われて…どうしようかって悩んで屋上に来たんだ』

「それ…愛ちゃんって女の子でしょ」

『知ってるのか？』

「一週間前…僕のところにも来たんだ。制服姿でね。ついていくと讓君が倒れてて…」

こいつが看病しててくれたのか…。

花瓶の花もこいつがやってくれたのかな？

『お前…いや、大樹も生まれ変わるのか？』

「うん。最初、猫になったんだけど…人間には勝てなくて…」

『俺なんかカラスだぜ？』

ハハッと二人で笑う。大樹は笑顔が似合う。

「僕の目が初めて赤くなったのは中学一年生の頃でね、友達もいっぱい居た。それで…好きな子に告白しようとしたけど…自信がなかった。彼女わ悲鳴をあげた。僕の目を見て……。何が何だか分から

なくて…」

『大樹…』

「だから昨日彰吾君から電話あった時、嬉しかった。たくさん話したんだ。だって…電話なら…顔見られないから…でもやっぱり教室行く自信がなくて…屋上に来たんだ」

だからさっき目が赤かったのか。

『なんで俺達…みんなと違うんだろうな…』

「生まれ変わるチャンスなのに…ダメだね…僕たち」

長い沈黙が続く冬の空の下。

この時期、木は寒そうだなあ。葉っぱも枯れてるし、自分じゃ動けないもんなあ。

この時期、虫達は暇そうだなあ。寒さを凌ぐために土の中にずっといるんだから。

そう考えると人間っていいのかもな。

いや、ズルイんだ。

暑かったらクーラーもあるし、冷たくておいしいアイスクリームや素麺、プール。

寒かったら暖かい暖房や鍋。

でも、人間が欲を満たす度に犠牲になる森林や動物。

いつから人間にそんな権利ができたのだろうか？

「讓君…僕達にも幸せ…ってあるのかな？」

『…あるさ。まず、生きている事…。これが1番幸せじゃないか？別に今まではいつ死んでも構わなかった。でも、カラスになった時、死にかけて…生きてた時は本当に嬉しかった。』

目指している幸せは同じでも…たどり着く幸せの場所は人それぞれだろ？

それに今日、七年ぶりに…人間の友達ができた』

「ありがとう…讓君」

『礼を言うのはこっちの方だぜ…大樹！』

「…ねえ、教室行ってみない？」

今のこの気持ちなら行ける。それは俺も大樹も同じだった。

『…よし！行くか！！』

時間的に昼休みだな…。

もういいんだ。俺らは一人じゃない。俺も譲も…これでダメだったら愛に頼んで人間以外の生き物になれるからってゆうからじゃない。人間である限り…人間として生きたい！

ここでまた逃げたら…俺達は本当にダメになってしまう。だから…！！

くガラッく

静まり返る教室。集まる冷たい視線。

「譲！大樹！来てくれたのか」

周りの反応などお構いなしに駆け寄る彰吾。こいつは本当にいい奴なのだ。

すると、彰吾の友達が俺らに向かってこう言う。

「あいつら…いまさら何しにきたんだよ」

「マジ…キモいんだよ」

「おい、何言ってるんだよお前…ら？」

彰吾が友達を叱る間もなく、俺の拳が炸裂していた。

『悪いな…人間が身勝手な生き物だつてのは俺達が一番知っている。だから…俺達はそういう奴らを許さねえ』

はあ…やつちまったか…。もう俺の目は真っ赤…あれ？

「讓君…目、黒いよ…？」

『大樹…あれだけ言われたのに…自信なくなつただろうに…目…黒いぞ』

俺達は顔を合わせると教室を飛び出した。

向かう先はもちろん愛と待ち合わせのあの場所だ。

『愛ー！出てこい』

「愛ちゃん！どこー？」

「はいはい。見てたわよ。二人共、よく頑張ったわね」

『愛！なんで…急に俺達は？』

「調べたら分かったわ。そもそも讓君達は極度なトラウマを受けたがためになつてしまったの」

『俺は…親友に裏切られた怒り…』

「僕は…好きな人に告白できなかった…恐怖心…」

「だから、治すにはそれと同じくらいの大きさで、逆の感情を持たばよかったの。」

譲君、あなたは大樹君に優しくしてあげれた。

大樹君、あなたは譲君のおかげで自信が持てた」

『確かに…俺…あんなに人と話したの…久しぶりだ』

「僕も…」

「そして…私の悲しみの反対は、喜び。」

実は昨日から治ってたの。

あなた達の行動がうれしかった。譲君は初めて会った私を本気で心配してくれた。大樹君は私一人じゃ負えない譲君の看病を手伝ってくれた」

『じゃあ…俺達……これから…』

「普通の高校生…?」

コクリと愛が頷く。

「『やったあー!』!」

「それじゃ…私の仕事は終わったから…か、かえら…な…きゃ…」

別れを惜しんだのか、突然愛が泣き出してしまった。

『愛…泣くなよ。お前が来てくれて良かったぜ』

「そっだよ愛ちゃん。それに…泣いたらまた目が赤くなっちゃうよ」

「だって…私…こんなに優しくされたの…初めてなんだもん…」

『それはお互い様だろ』

「…あ！讓君…彰吾君達が…」

もうとつくに昼休みは過ぎているというのに、章吾が俺が殴ってしまった奴らを連れてきた。

「讓…大樹…さっきはゴメンな」

「お前達にあんな勇氣あつたなんてな…」

「さあ、午後の授業始まるぞ！行こうぜ！！」

「大樹…学校辞めんなよ！まだ間に合うからな…！」

『みんな…大樹！行くか！！』

「うん！！」

校舎に戻ろうとする時、俺と大樹は声をそろえて大きな声でこう言った。

「『愛ー！ありがとなあー！！お前も頑張れよあー！！』」

「…愛？いきなり何言ってた？」

「『別にいゝ…ただの…二人言』」

「なんだそれえゝハハハッ」

俺達は確かに生まれ変わったよ。…だから、今までの生き方をリプ
レイするんだ。やり直すんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6441a/>

リプレイ

2010年10月15日17時09分発行